

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	文学教育解体・新国語教育構築について
Author(s)	浜本, 純逸
Citation	国語教育思想研究 , 32 : 119 - 121
Issue Date	2023-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054807
Right	
Relation	



文学教育解体・新国語教育構築について

元・神戸大学 浜本 純逸

キーワード：文学教材、情報テクノロジー、母語教育

はじめに

20世紀末1990年代の国語科教育は行き詰まっていた。文学作品を教材とする講義中心の一斉授業がおこなわれていた。生徒の考える場が少なくなり、国語科から楽しさが失われ国語嫌いが増えていた。

一方、社会ではラジオ・映画・テレビ・マンガが普及し、情報化が進んでいた。教育は教育課程の解体と再構築を迫られていた。

国語科にも新しい構想が求められ、映像情報の教材化が求められていた。

このような状況のなかで、1998年7月、難波博孝氏は、日本文学協会国語教育部会のシンポジウムにおいて提案「とにかく、文学は、教材界の特権的な地位から降りてもらいましょう」を発表したのである(丹藤博文・難波博孝・森本真幸・府川源一郎「〈シンポジウム〉進行する教育改革と文学教育 討論」『日文協国語教育』29号、1998年11月)。「特権的地位」は、授業時間の多いことと価値観が高いことを意味していた。

一 文学は、教材界の特権的な地位から

降りなければならなかった

各教科の内容の増減を考え始めると、「その目的は何か」、「その方法はどのようにどのくらい時間を当てるか」などの本質的な問題を考えなければならなくなる。その教科内容の存立意義まで考えなければならなくなる。

難波氏は、当代では文学の価値が低下し、その機能が果たせなくなっていると認識していた。「文学教育のやりたい目標(たとえば人間形成、新しい人間観の創造)は大事にしたいのであるが、「それはもう文学では果たせないでしょう」と言う。成長中の世代は、マンガや絵画などの映像情報やラジオや音楽などの音声情報によって「人生」を学んでいた。

また、文学教育内容の多くはマンガや映画によっても教えられると主張していた。たとえば、文学教育の内容として「主題」、「構成」、「視点」などが

あるが、それは、マンガでも映画でも教えられる。「視点」はマンガや映画のほうがかえって教えやすいのではないのか、と言う。

つまり、教育目標を達成するために「他のメディアがいい場合は、他のメディアを使っていいんじゃないか」と提案していた。

難波提案は、「文学教育をなくせ!」と言っているのではなかった。

では文学教育はどこへ位置づけられるのであろうか。

難波氏は、「文学教材の特権的地位」を問うことによって、「国語科解体」／再構築のキーとしたのであった。

二 新しい社会における国語科教育構築を

呼びかけていた

ある教師の「高校生の不読者が70%を超えた」という報告を受けて、難波氏は、「さもありません」と認めている。なぜか、それは高校生が「国語科の勉強は役に立たない」と考え、映画・テレビ・マンガなどによって人生について学び、娯楽として楽しみ、「文学の読みに参加してくれない」という実態を知っていたからである。

氏は、成長中の世代の学校不信に向かいあうこと、映像情報を教材化すること、すなわち、国語科の再構築をめざしていたのである。

1970年代の高度経済成長は、国民の教育要求を高め、高校が増設されていった。1980年代には制度的に進学希望者のほぼ全員が高校に入学することが可能になっていた。親たちの「いい学校・いい大学・いい会社」という欲求は、受験競争を激化させ塾通いを生んだ。それは学校不信の現れでもあった。

受験競争は、学校を画一化し、不本意入学者を生むという「ゆがみ」をもたらした。いじめ・登校拒否・対教師暴力の対策指導に忙殺される学校も現れた。教師(国語科担当の教師も)は、学校のカリキュラム(国語科の内容)はどうあるべきか、という課

題に直面していった。

このような状況において発せられた「文学は、教材界の特権的な地位から降りてもらいましょう」という難波提言には、「これからの教育課程はどうあるべきか」という問いと「文学教育とは何か」という二つの問いが仕掛けられていたのである。

しかし、シンポジウム参加者の次の発言に見られるように、多くの教師および研究者は、生徒の言語生活状況の変化に鈍感であった。

「新しいいろんな理論が出てきて、それに意欲をかき立てられるんだけど、古い教室のかつての考え方で大体ね 済んでしまうことを、難しくしちゃっているんじゃないか」(42頁)

シンポジウム参加者は、国語科の解体・文学教育の再構築に対峙せず、既成の枠内での文学の授業における学習者の「参加・同化・投企」の区別について熱弁を振るっていた。困難な状況において多くの教師にとって参加型の授業・同化型の授業・投企型の授業の区別ができるであろうか。また必要であろうか。

当時、国際的にはユネスコなどの教育改造に取り組む動きがあり、日本の文部省は総合学習を広げようとしていたが、それは、一般的教師にまでは浸透していかなかった。私は、国語科に情報教育を取り入れる新単元学習に取り組んでいたが、それは国語科内の改造運動に過ぎなかった。

三 難波博孝「国語科解体／再構築」案と

文学教材

氏は、国語科を解体し、新しい国語科構造を構想する試みを提案した。それは1999年前後に書かれた諸論文をまとめた博士論文『母語教育という思想 国語科解体／再構築に向けて』(2008年6月 世界思想社)に収められている。『母語教育～』には、母語科を六科目に分ける再構築案が提示されていた。

A コミュニケーション科

実用的な、話す・聞く・読む・書くを行うモジュールである。スピーチの仕方、説明文の情報読みの仕方、説明書の書き方、などを学ぶ。

B 表現(あるいは表出)科

さまざまな感情の表出について知ったり、実際に行ったりする。詩、作文、演劇だけでなく、絵や音楽とのコラボレーションなどについても学ぶ。

C 思考(あるいは論理)科

ここでは、論理的思考の方法、批判的思考の方法などを学ぶ。説明文や評論文だけでなく、あらゆる言語事象を使って、思考を鍛えていく。また説得の方法についても学ぶ。

D イメージ科

ここでは、私たちの心の中にごめく、さまざまなイメージ／イマジネーションについて学び、実践する。例えば、詩を読んでイマジネーションをふくらませる、地域を歩いて、その地域を覆っている民俗学的なイマジネーションを知る、などの実践が考えられる。

E 思想科

私たちの言語行為を裏からコントロールしている、私たちの「心の構え」、それを人によっては、信念とも、イデオロギーとも、素朴理論とも呼ぶだろうが、その「心の構え」について学ぶものである。私たち自身の内面にある、「心の構え＝思想」はどんなものか、他の人々や歴史上の人々虚構上の人々はどのような「心の構え＝思想」に囚われているのかを学ぶ。

F メディア科

これは、メディアリテラシーを身に付けるモジュールである。私たちが生涯にわたって出会うであろう、さまざまなメディアについて、どのように受け止めていけばいいか、どのように批判していけばいいかを学ぶ。メディアには、文字言語によるものも含まれていると考えたい。また従来の読書指導はここに吸収される。このそれぞれの科目で、必要ならば、文学教材が用意される。

ここで重要なのは、「文学教材だから、これを教える」ではなくこの科目(「コミュニケーション」「表現」「思考」「イメージ」「思想」「メディア」)だから、この文学教材で、これを教えるのだという考えに基づくということである。(『母語教育～』278～280頁)

氏に拠れば、21世紀のICT(情報テクノロジー)社会では、国語教育は解体されて六科目の『母語科』として再構築される。

この提案はユニークであり、疑問や批判を誘発する。これまでの文学教育はどこへ位置づけるのだろうか。

「F メディア科」の実用的な面は「A コミュニ

ケーション科」に吸収されるかもしれない。また「C 思考（あるいは論理）科」と「E 思想科」は合体させるといっそう充実した科目になるかもしれない。それはともかく、ポレミックな案であり、検討すべき再構築案であった。

四 難波提案の文学教材の位置

難波提案は、「文学教材は、特権的な地位から降りてもらいましょう」と題されていた。

私の理解では、『母語科』の文学教材は、大きく二種（仮りに甲型・乙型と名づける）に分けられる。甲型は、それぞれの目的を達成するためのツールとして使われる文学作品である。

氏は、メディアの構造を教えるというねらいなら、文学の構造を教えるよりも、テレビや映画、アニメやマンガ、広告などの構造を教える方がずっと身近だし、役に立つ（視点論などマンガや映画の方がずっとわかりやすいし、また目に触れる機会も多い。）（23頁）と述べている。

乙型は人間理解を深めるために読む文学教材である。

氏が実践事例の中で取り上げている「蠅」（横光利一）、「夏の葬列」（山川方夫）、「空中ブランコ乗りのキキ」（別役実）、「ごんぎつね」（新美南吉）などであろう。

おわりに

難波氏は、「ごんぎつね」の読みを例に、文学の読みは国語科の教育を超えるとしている。「走れメロス」は道徳に触れるが、「高瀬舟」は道徳・倫理に触れている。これから、この問題も追求していただきたい。

難波氏の「国語科解体／再構築」は、20世紀末の国語教育の行き詰まりを超えるための提案であり、21世紀情報化社会の情報テクノロジーの発達と広がりを見すえたすぐれた再構築案であった。

それから25年を経て現在まで、思想界・経済界・教育界等からさまざまな未来展望がなされている。新井紀子氏による2019年のICT活用の思考力育成案は、その一つである。

質問や指示に対してなめらかな文章で返答する「チャットGPT」も公開された。私たちは、多くの改造案に学びつつ、AIの発達に即応する明日の国語教育を創出しなければならない。

新しい国語教育を構築するにあたって、25年前に提出された難波博孝氏の「国語科解体／再構築」案は、確かな一つの検討材料である。